

随筆「田中瑞木と猫の物語」ねこ新聞，猫新聞社，2002

家には娘の瑞木が描いた油絵が58点あります。その中の1点はねこ新聞7月号の表紙となった「よそのねこ」です。この絵は私たち二人の特別な一枚となりました。娘にとっては画家としての記念となる出発の絵。私にとっても、長い間待っていたものに出会えた喜びの絵であり、ことばを伝えることが不得手な娘がこころのなかを表そうとしていることを知ることになった、忘れられない一枚となりました。

5歳くらいから猫に特別の愛着を示しはじめた娘は、12歳のときに「よそのねこ」を描くことで、「家には猫がいないよ、私も猫を飼いたいよ、こんなふうにしっかりしている」と伝えようとしていると私には思えました。それがきっかけとなり、それからチンチラ混種のビリーちゃん、日本猫ドットちゃんとのんちゃんの姉妹猫と続けて3匹飼うことになりました。現在はアメリカンショートヘアの静香ちゃんのみが娘の妹分として、家族の仲間入りをしています。名前は歌手の工藤静香さんのファンである娘が迷わず命名しました。

「静香ちゃんのどこが好き」と尋ねる私に、「ここ」といいながら瑞木はおなかをさすります。嫌がる静香ちゃんは瑞木の指を噛みます。「猫はにゃんにゃん、赤ちゃんはえんえん泣くの。わたしは泣かない、大人になったから」と話しかけます。福祉作業所で働いている娘は毎月末、工賃をいただきます。二万円くらいですがそれで静香ちゃんのえさと砂を買います。じぶんでしっかりと育てる気概をもって、「かわいい猫、私の猫だよ」が口癖です。もちろんトイレも責任をもって始末します。

瑞木は1999年から地域のグループホームに月曜から金曜まで過ごし、週末に帰宅する生活をしています。グループホームは世話をしてくださる方と4人の仲間が、自立を目指して地域のなかで暮らしているところです。家から近いので、娘は毎日猫の世話に通って来ます。3時30分からは静香ちゃんが耳を玄関に集中させて待っています。4時過ぎにドアが開くと、静香ちゃんがにゃあにゃあとからだを壁にこすりつけながら娘を出迎えます。猫は盛大に歓迎をしていますが、娘は悠々としていてすぐにはごはんをあげません。自分の用事を一通り終えてからでない、静香ちゃんと向き合わないのです。猫もお姉ちゃんはこういう人なのねと分かっているらしく、大歓迎の儀式を済ませるとじっと待つ体制に入ります。静香ちゃんは気の強い性格です。しかし、このときばかりは猫が変わったかのように、お姉ちゃんを一番に尊重していますというふうな態度をします。

瑞木は妹のように世話できる静香ちゃんを愛し、また逆に静香ちゃんからもたくさんの愛をうけています。しかし、グループホームでは猫を飼うことはできません。障害のある子どもの親になり、ふつうのことがふつうにできないのはなぜかなって、考えながら歩いてきました。その一つはいつまでも猫と一緒にいたいと思う娘のきもちを大切にすることです。誰もがどこで暮らすかを選択するのは自由です。ペットのいる暮らしも同じではないでしょうか。瑞木というと、猫と人間はどっちがどっちということではなく、おたがいさまの存在で、分け隔ては意味がないと気づかされます。誰かと心を通わせながら一

緒にいるって、どんなにすばらしいことかと知らされます。

だからでしょうね、瑞木の発想は豊かです。自分が好きな自転車だから猫も乗りますよと「自転車に乗ったねこ」を、私の腕の中に抱かれたら安心よと「黒猫を抱いたわたし」を描きました。毎号ねこ新聞が届くと瑞木は「はい、静香ちゃん、ねこ新聞よ」と、猫の鼻先に新聞を広げて見せます。今月号の表紙100号の大作「ねこの原っぱ」はみんなで原っぱに集まって花や紙ふうせんで遊びましょうと、半年間かけて描き上げました。キャンパスの猫たちは瑞木をじっと見つめ続けていました。瑞木は猫たちとともにだちになって、毎日ベッドの傍らではなしをしていました。猫も娘も尊くて、自由で、純粋で、輝きながら、自然に生きています。

この絵を見ていると、私は幸福感で満たされ、なんとも不思議な力がわいてきて、田中瑞木美術館をつくろうと夢を見ます。様々な出会いが生まれ、気持ちのいい時間が流れ、静かにこちらを見つめる12匹の猫たち（今のところ）と、猫一倍好奇心が旺盛で来る人すべてを大歓迎する静香ちゃんが待っている場所。「きっと、できるよね。みーちゃん」と私が声をかけると、彼女は「そう」と答えました。「いいね、美術館」と私はつぶやきながら、物語で終わらせたくないと思いに耽る今日この頃です。